

岩手県における「カグヤモチ」の栽培法

高橋和彦・石川 洋*・根子善照**・多田 徹**・菊池浩之***

(岩手県立農業試験場県北分場・*岩手県立農業短期大学校・**岩手県立農業試験場・***一関農業改良普及所)

Cultivation Method of Glutinous Raice Variety "Kaguyamochi" in Iwate Prefecture

Kazuhiko TAKAHASHI, Hiroshi ISHIKAWA*, Zenshyo NEKO**,

Toru TADA** and Hiroyuki KIKUCHI***

(Kenpoku Branch, Iwate-ken Agricultural Experiment Station・*Iwate
Agricultural Junior College・**Iwate-ken Agricultural Experiment Station・
***Ichinoseki Agricultural Extension Service Station)

1 はじめに

岩手県では、平成元年度に、県中北部を適応地帯として、従来の「わせとらもち」に替えて、「カグヤモチ」(旧系統名ふ系糯147号)を奨励品種に採用した。「わせとらもち」は耐冷性に優れ、栽培しやすい反面、もち質にやや難があったが、「カグヤモチ」はもち質・品質に優れ、多収性を有しており、また耐冷性も強く安定していることから、今後、「わせとらもち」に替わって栽培面積の拡大が見込まれており、栽培法の確立が急がれていた。そこで、それまでの試験結果を基に、「カグヤモチ」の良質安定生産のための期待生育量及び施肥法、刈取適期を主体とした栽培法を明らかにしたので報告する。

2 試験方法

(1) 試験年次及び試験場所

1) 奨励品種決定調査

1987年～1989年；岩手農試本場・県北分場，現地圃場

2) 栽培特性試験

1989年～1990年；岩手農試本場・県北分場

(2) 目標収量水準；600kg/10a

3 試験結果及び考察

「カグヤモチ」の穂数と収量の関係は、冷害年を除いて、 m^2 当り穂数が430本～480本で収量は概ね600kg/10aが確保された(図1)。籾数との関係を見ると、低収事例で籾数データがないため明確な傾向が認め難いが、 m^2 当り籾数3万4千～3万9千粒で安定的に600kg/10a以上となった(図2)。穂数、籾数とも、多肥条件で多くなったが、登熟歩合が低下し、大きく増収に結びついておらず、品質も低下する傾向があった。穂数と籾数の関係は、穂数430本～480本で m^2 当り籾数3万4千～3万9千粒を確保することが十分可能であった(図3)。籾数と登熟歩合の関係は、多肥条件を除いて、 m^2 当り籾数3万9千粒程度までは登熟歩合が概ね80%確保された(図4)。他に一穂籾数、稈長、千粒重と収量の関係等も併せて検討し、「カグヤモチ」の収量水準600kg/10aを得るための期待生育量を表

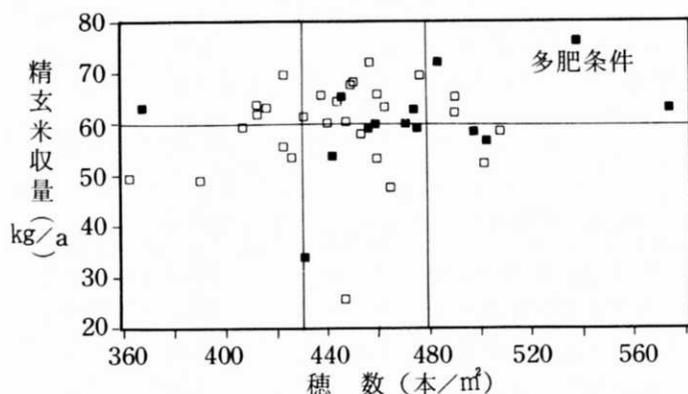


図1 穂数と収量

注. 2試験方法の(1)に記載した試験データから作成
以下図4まで同じ。

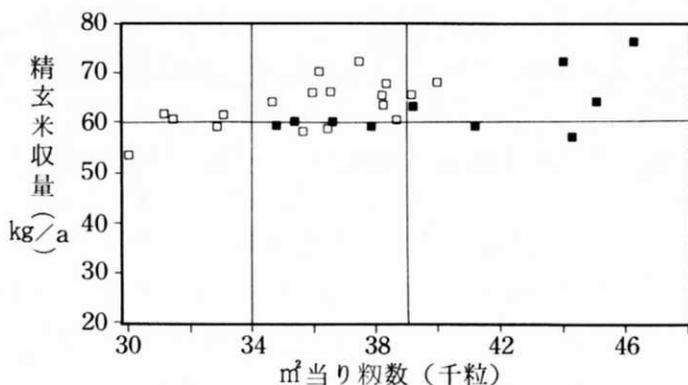


図2 m^2 当り籾数と収量

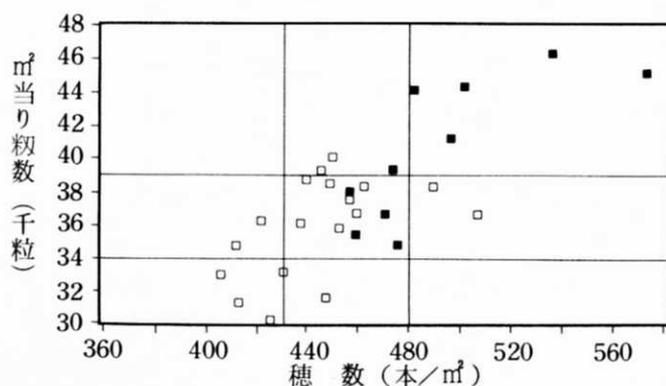


図3 穂数と m^2 当り籾数

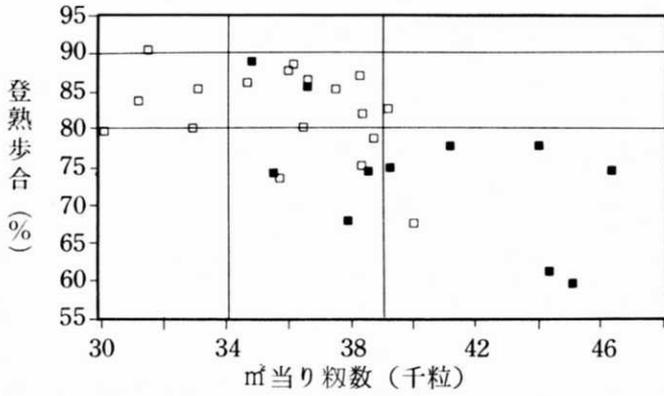


図4 m^2 当り粒数と登熟歩合

表1 収量水準600kg/10aを得るための期待生育量

稈長 (cm)	穂数 (本/ m^2)	一穂粒数 (粒)	m^2 当り粒数 (粒)	玄米千粒重 (g)	登熟歩合 (%)
72~77	430~480	77~85	34,000~39,000	20.5以上	80~90

1のように整理した。

次に、施肥法についてであるが、基肥の施用量、追肥の時期及び施用量を組合せて実施した栽培特性試験の結果の一部を図5に示した。基肥は、標肥条件で、十分穂数・粒数が確保され、収量はほぼ600kg/10a以上となり、「わせとらもち」より多収となった。多肥条件では、穂数・粒数が増加して多収傾向となったが、登熟歩合・千粒重が低下し、品質もやや劣ることが認められた。追肥については、幼穂形成期追肥は、一穂粒数の確保に効果がみられ、また、減数分裂期追肥により千粒重はやや増加する傾向にあった。以上、良質安定生産のための「カグヤモチ」の施肥法は、施肥法と収量・収量構成要素の関係からみて、基肥は、「わせとらもち」並の窒素成分量6~8kg/10aが適当であり、追肥は、一穂粒数がやや少ない品種であるので、幼穂形成期重点(窒素成分量2kg/10a程度)として、粒数の確保を図ることが有効であると考えられた。

刈取適期については、刈取時期別品質調査(図6)に示すとおり、登熟積算温度(平均気温)950℃程度で整粒歩合はほぼ80%に達した。他に被害粒の発生状況、刈取指標についても併せて検討した結果、「カグヤモチ」の刈取適期は、登熟積算温度で950~1,050℃の範囲、刈取指標でみると黄化割割合80%、枝梗黄化割合70%程度からと考えられた。

4 まとめ

岩手県中北部の新しい糯品種である「カグヤモチ」について、収量水準600kg/10aを得るための期待生育量を策定するとともに、栽培法については、施肥法と刈取適期について明らかにし、平成2年度指導上の参考事項として普及に移した。

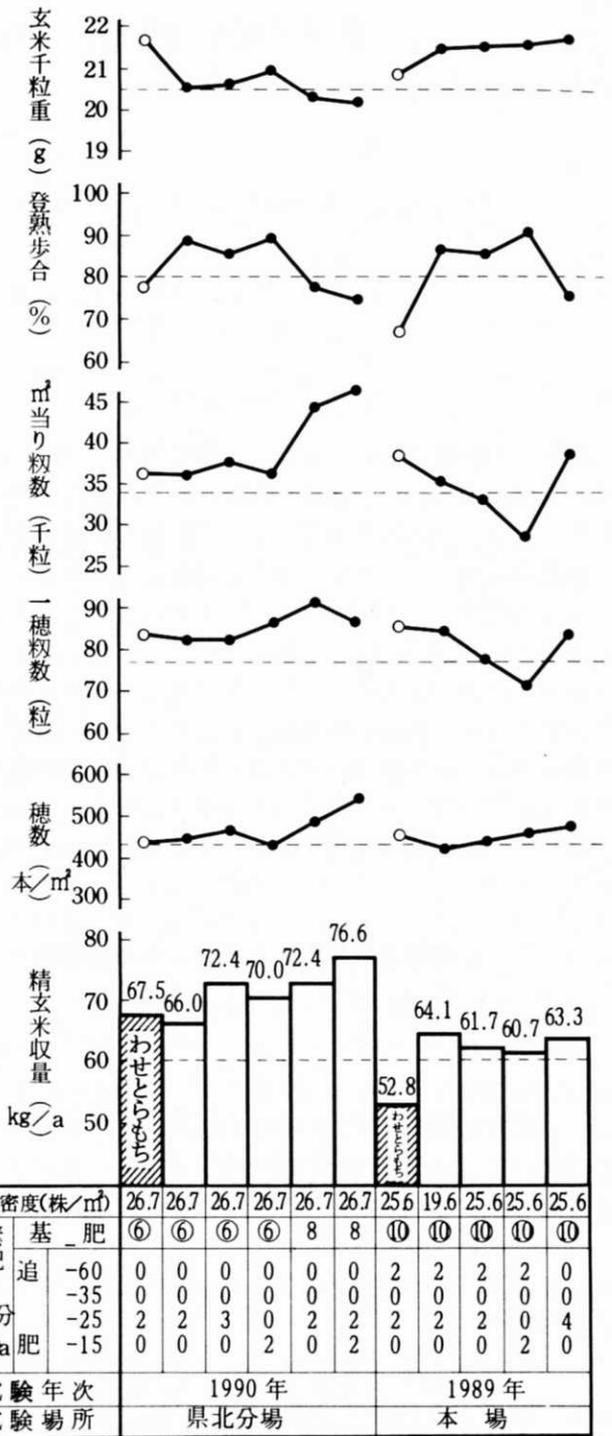


図5 施肥法と収量・収量構成要素(栽培特性試験)
注. 窒素施肥量の基肥の⑥, ⑩は県北分場, 本場の標肥条件

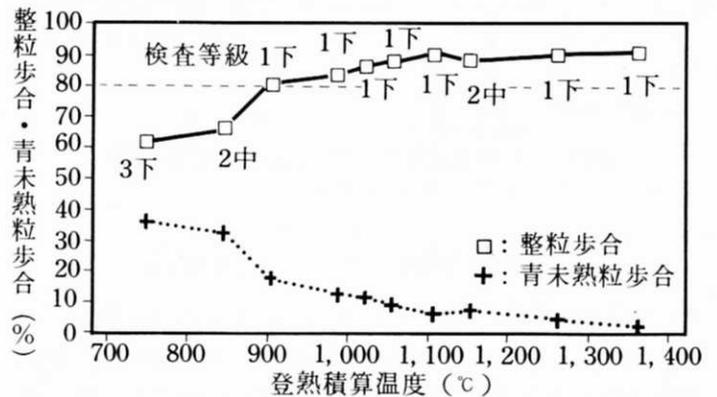


図6 刈取時期別品質調査(1990年 県北分場)